

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「あれこれ」の中から育つ構えや活力・生命力：「重ね合わせ」という発想の獲得
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	児童の言語生態研究 , 17 : 90 - 110
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045210
Right	
Relation	



「あれこれ」の中から育つ構えや活力・生命力

—「重ね合わせ」という発想の獲得—

宮田 雅智

はじめに
対療法の教育から体質改善の教育へ

〈教育は投棄ではない。〉

それは生まれ出た人の子が、
人の心を獲得していく過程を

保証することである。〉

上原輝男先生の著書「感情教育論」（昭和
58年 学陽書房）の冒頭にある言葉です。

平成3年に刊行された児言態の本「小学校
国語の授業はこうする 感情・思考・構え
編」の「はじめに」ではさらにこう書かれて
います。

〈今や教育は、世俗的な合目的対策として
だけしか理解されていない。このままで行け

ば学校は減ぶ。受験のための塾だけで事足り
る。しかし、入るべき学校が減んだら、予備
校もなくなるのが理屈だが、学校も生き残り
作戦として称してまたこの競争原理に従うか
ら、まるで、学校社会というものは、この世
に仕掛けられた白ねずみの回転車のように、
若いエネルギーを消耗させるためだけに存在
しているといったらうそになるだろうか。

∴ 私たちは動揺してはならない。まして

や、この領海侵犯者と似た仕事をしてはなら
ない。私たちの仕事は、母国語の教育なので
ある。子どもの魂の成長と一つになっていく
ことを母国語という。小学校教師にかせら
れた最も大きい負担は、教科「国語」のお仕
着せではなくてその子どもの母国語発達だと
思うことである。たとえ、面映ゆくても、私
たちは教育者の孤塁を守らねばならない。〉

平成8年に上原先生が他界されてから10年
以上、御承知の通り世はますます現実対応に
あけくれ子どもも大人も活力が枯渇寸前の状
態です。「領海侵犯者と似た仕事」どころか
予備校の教師を模範にして公立学校の先生が
学ばされる、テストの平均点によつて予算
（税金）の配分を変えようという発想に至っ
ては、もはや公教育が「人間を育てる」こと
を放棄したかのようです。

「それでは上原先生（児言態）は各教科の知
識・理解、そしてテストで得点が出来よう
にすることは意味のないことだと考えるの
か？」という趣旨の疑問は私自身も今まで随
分と受けてきました。そうした事を全く無視
しようというわけではありません。ただ、
「∴に問題があるからこうした教育」「∴に
関心を持たせるためにこんな教育」というよ

うな一つ一つの現実的課題への対応に追われているばかりの教育界の姿に賛成できないのです。

それは例えば西洋医学の発想と東洋医学の発想との違いにも似ています。西洋医学では医師が専門分野によって細分化されすぎた結果、体を一つの有機的なつながりを持つものとしての発想が見落とされ、ある症状は改善されても別の症状を引き起こす等々のことがあります。子どもたちを何とか大人の意思通りにしようと同様な手を打ちながら、ますます歪みが発生している状況はこれと似ています。

東洋医学では体を一つの全体としてみます。そして体質レベルでの歪みを改善し自然治癒力を高めることから様々な不調を解消しよう、さらには今後も病気になる健康な体を獲得しようと発想します。

今回の表題でいえば「構えを育てる」とは「体質改善」です。それに人間としての「活力（生命力）の高まり」が相俟って「イマジネーションの働き」自然治癒力を高める」ということに該当します。初等教育の段階や、本質的な問題解決を目指す教育を考えるならば東洋医学的な発想に立つことが大切だと考えているのです。

ですから児童態は形の上では初等教育は母国語教育という観点から「国語の授業」を中

心に実践をしてきましたが、本当はすべての教科・領域、さらには「子どもの日常生活そのもの」を包み込む実践を行ってきたと考えています。

もし今の世の中で最優先のように要求されている「高い得点力」がどうしても必要なのだとしたら、なおのこと児童態が行ってきたように体質改善的な発想の教育を初等教育の段階で本気で行った方が後々大きな成果が出ると思つていきます。上原先生の言葉にもこのようなものがあります。

「塾がやっているのはただひたすら練習までだということだけだよ。だから塾で効果をあげるには出席しなければだめだ。トレーニングなんだから。」

だけど児童態が考えるのはそうばかりかみたいに出席さえすれば成績あがりますよ、ついでうんじやなくてこの方法をとりさすればマア塾に毎日毎日かわわなくても児童態で月に何回か刺激を与えてやればそれでさっさと上がつていく、ついでいうことでなくちゃだめよ。」

実際に私は平成8年に体を壊して小学校を退職、以来10年以上家庭教師という立場で現在も中学生や高校生を中心にテスト対策や受験対策の指導に追われています。ほとんどの場合、教えているのは「数学」や「理科」、あるいは「英語」であって、国語を教える機

会はほとんどありません。それでもやはり教えている教科という枠を越え、生き様そのものと関わる教育活動を実践したいという願いがあります。

その実現のために、形の上では教科の指導を行いながらも「児童態風隠し味」つまり、「母国語」という観点での「思考・感情・構え・用具言語」という4つの柱を意識しながら教えていきます。すると、本来の意味で理解が深まり、通常の塾や予備校とは違った感覚で直接は教えていない教科や内容まで大きく変容する子どもたちが大勢でできました。

それは小学校段階本来の指導が欠落していたために伸び悩んでいた中・高生が、そこを補えた事で各自の体質そのものが改善され、現実対応能力という自然治癒力がアップし、自力で壁を乗り越えられるようになったという事なのです。

参 考

上原先生語録より

「次代をになえる子どもを育てなければならぬ。それは未知数を感じさせる人間。」

今の世の中に合うように作られた優等生は自分の世界を作つて外に出ようとしないから次代をになえない。」

「現実いっばいの子ども達は『壁にぶつかつた』そうしたらこの壁を抜けないですよ。だけどイメージ力のあるやつは突き抜けてい

く。

現実の時間・空間とは違う世界に入っているんですよ。『ああ、この子は新しいイメージの世界に入ったんだ』と、これでいいんですよ。

人生の苦難を我慢して乗り越えるのではなく、意識を動かすことで乗り越えるのではなく、「ちゃ。」

注* 知的教科を中学生・高校生にどう児言態風に実践していったのかという事に関しては別の機会にまとめたいと思っています。実践の一部は「ワニワニ学級」というホームページに「ためき先生」と名乗って掲載しています。

(<http://www2.plala.or.jp/WANIWANI/index.html>)

上原先生の特集も同ホームページ内の「学問のお部屋」に記載しているのでそちらもご覧下さい。

1 『夢・あこがれ』

生命の道(みち)

児言態の雑誌16号に「生命の指標(らいふ・いんできす)は我が内にあり——「児童」後の子ども達への児言態の実践——」を書いたのですが、この表題にある「生命の指

標：らいふいんできす」は上原先生の師である折口信夫先生が好んで用いられた語彙です。

構えや活力を育てると言っても、子ども達自身の中にそうしたことへ向かう気持ちが湧き上がってこないと体質そのものが改善されることはなかなか起こりません。そうした気持ちを引き出し、実現に向けての具体的な行動へ駆り立ててくれるものは、「すべて生命の指標(らいふ・いんできす)」と言えます。

耳慣れない言葉だと思いますが、昨年のノーベル賞受賞者の先生方が盛んに用いていた「夢・あこがれ」もこの中には含まれます。

ノーベル賞の授賞式前の記者会見でたしか益川先生だったと思うのですが「夢やあこがれがきちんとある子は言われなくても自分から勝手に時間を作つて必要な勉強もしますから」というような趣旨の発言をされていましたが、まさにその通りだと思います。「夢・あこがれ」は現実の壁を超越する原動力と成りうるのですから、イマジネーションの世界に誘ってくれるより強い牽引力を持った「夢・あこがれ」と出会えるような支援をすることこそが我々大人の役目です。(夢について児言態がどう考えているかは14号「あの子にこの子」15号「子どもと夢」等々に関連論文があります)

しかし現実には最近の子ども達に「夢は何

ですか？」と問いかけても「別にない」「分からない」と答えたり、あつたとしても「でも実現するのは無理」とばかりに夢に向かつての具体的な努力はしない場合が少なくありません。努力して挫折するよりは最初からチャレンジしない方が傷つかなくて済む、という典型的な姿勢です。

そもそも今の子ども達はあまりに幼い頃から自ら描く「夢やあこがれの世界」を大人によつて否定されてしまいます。それも「そんな仕事では生活できない」等々の極めて現実対応・物質的な狭い価値観を根拠にしています。また頭ごなしに親によって「夢」(人生の理想像)を決められ制限されている場合も少なくありません。これでは「どうせ夢を求めたつて無駄」ともなります。

それなのに思春期・青年期の頃になり、進路を決める段になって突然「あなたの夢は？」「自分の夢をいかせる生甲斐のある仕事につきましよう」と言われても「何が夢なのか、何が自分に向いているのか分らない」と混乱してしまうのは無理からぬことです。しかも大人や学校側の都合だけで決断の制限時間まで決められてしまうので、ますます焦つてしまい、夢を持ってない自分を否定する気持ちに凝り固まつてしまいます。

仮に「自分の夢やあこがれ」をきちんと語ることができても、それがあまりに現実意識

に根ざしたものであったり他人からの影響を受けたものであると、根源的に自分を突き動かす力は弱いですから注意が必要です。

「あこがれ」及びそれに関係する上原先生の語録の中に次のようなものがあります。

〈あこがれ〉

*子どもの生活の中にあかりをとめます。クセのつく時期に次のあかりをとめてやる。
それが『あこがれ』です。あかりをとめせばハッと驚く。イメージを揺り動かしてやる。

*日本人の考える魂は浮遊するんです。魂が抜け出でどこかに飛んで行ってしまつ。飛んで行く先が『あこがれ』なんです。

〈遊び〉

*『遊び』は本来、神とたわむれる事と日本人は考へてきた。神の世界にとっぴりとつからせる。遊びの中で子ども達を本来の姿にもどしてやる。そうして自分のイメージを確認すれば十分一人で遊べる。…自分の世界を作り囲いに入れるから。

*「能力で何かしよう。」ではなく『持っている能力で遊ぼう。』とさせる。好き勝手な事をしないと本当の能力は出てこない。

*自分を生かしてやるのは『幼い頃の遊び心』なんですよ。ね。

(注) もちろんこの場合の遊びはテレビゲーム等々の遊びではありません。非現実世界を

求めている子ども達の無意識が引き付けている事は確かなのですが、これは他人の作った非現実世界に単に逃げ込んでいただけなので、本来の自分のイメージ世界に出会うのではなく、逆に歪んだイメージの世界に汚染されてしまう危険があります。

〈あれこれ〉

あれこれ考えている子は『自分の落ち着く場所』をみつけている。あれこれの中で自分のイメージを確定させておこうとしている。

いろいろの中から「コレ！」となつた瞬間、イメージが確定して落ち着く。

この「遊び」「あれこれ」というのは大切な関連事項だと思います。役に立つかどうかや損得ばかり気にする人達からみれば「大なる無駄」な時間や行為であつても、それを経て自らの内から湧き上がってきた「夢」や「あこがれ」ほど自分を強力に牽引してくれる力を持っています。

いかにも合理的なつながりや現実対応意識がみえみえのものではハッとする感覚が少ないので心がゆさぶられませんか。

2 「夢・あこがれ」の 出口を阻むもの

現代人の意識を縛る「常識」

教育に限らず様々な問題を生みだしている現代の社会風潮の根底にどんな「常識」が横たわっているのかを点検することは解決に向けての重要なことです。「夢・あこがれ」との出会いや「イメージネーションの世界に没入すること」を阻むものとして特に強く感じるのは次の3つの「常識」です。さらにいえばこれまで児童態がテーマとしてきた「構えの変革」「時空の転換」を素直に起こすことや、人間の根本的な活力(生命力)が湧き上がり「神性と野性」を高めることをもこれらの常識が阻んでいるのです。

① ニュートン力学的発想

別名「ニュートンの因果律」と呼ばれているものです。物体に作用している力等々が分かればその後の変化が決定される、逆に今の姿を通して過去を類推することが可能ということにもなります。

ニュートンがこれを世に発表したのは日本という江戸時代ですが、この発想が例えば教育の世界では「学歴信仰」「勝ち組・負け組」というような形で未だに大きな影響を与えています。

また「経験主義」の根底には $F=ma$ というニュートンの運動方程式からの発想も影響していると思われれます。「力(F)」と「加速度(a)」の間には比例関係があると

いうことです。大きな変化を起こすためには、「強制的にでも繰り返し力を加える大人の姿勢が必要」という発想になるわけです。カリキュラムの上では「教えた（力を加えた）部分は変化する」教えなければ変化しない。あらゆる分野を対象とした指導の時間の「確保」となります。

勿論このようなことを書いたからといってニュートンの業績を否定しようと思っているわけではありません。ただ、マクロな物質世界にしか適応できないニュートン力学的な発想を心の世界にまで持ち込みすぎた後世の人々に問題があったと考えます。

② 進化論

数ある進化論の中で主流と呼ばれているものが現代社会に及ぼしている負の影響についてはイメージ研究の第一人者であった藤岡善愛先生が晩年に児童態の会員に語ってくださいました。（平成3年4月6日）主に次の二点に集約されます。

一つ目は、「弱肉強食・適者生存」環境により適応し勝ち抜いたものだけが残っていくから生まれた「どンドン競争にかりたれば優れたものだけが残りより良い社会になる」という市場原理（競争原理）です。

もう一つは「反復説」の影響です。反復説とは簡単に言えば「受精した瞬間から個人が成長していく時に、それまでの進化の過程を

繰り返す」というものです。だから「子どもは人間になる前の段階に相当する下等な段階である、だから高等な人間である大人に無条件に従うべきだ」「下の学校は上の学校の準備段階」よりレベルの高い学校へ進学できないければ完成品になれない（途中経過には意味がない）」という発想へとつながっていきます。

③ 形ある世界のみが実在の世界

現代社会は地位・名誉・金銭など形あるものにあまりに価値を置きすぎています。その姿勢が教育の世界でいえば「得点」「進学実績」などの数値目標化に最も出ています。

「とにかく子ども達が点数を上げてくれればいい」その一つがテスト前の超頻問による反復練習です。今日のようにそれによって学校の予算や教師の地位まで脅かそうとする地方自治体が増加している状況では一概に先生方を責めるわけにはいきませんが、そうまでして高得点を出すことにどれだけ教育的意味があるのでしょうか。

かつて国語教育で「叙述に即した読み」というのが盛んに強調された時期がありました。あれなどもこの風潮に少なからず影響しているのかもしれませんが。本来は自分勝手な読みとり方をしてはいけないという注意をうながすためのものだったはずなのですが、それが徹底しすぎた結果「書いていない事は想

像してはいけない」という指導になってしまったようです。

数年前にある小学生から聞いた話ですが「ごんぎつね」授業導入時の初発の感想で「ごんが死んでしまつてかわいそう」と書いた子が担任から「ごんが死んだなんてどこに書いてあるの！」とそれはそれは厳しく叱られたのだそうです。そして授業は傷が治ったごんと兵十が仲良く暮らすようになったというハッピーエンドでまとめられたようです。教師が無理矢理そうした形にもつていってしまう方が余程「そんな結末、どこに書いてあるの？」と内心思いながらも叱られたくないために従つた子どもは少なくともなかったと思います。

こうした結果、「先生の期待している通りのことを想像できなければダメなんだ」という姿勢が定着し、内から湧き上がる想像への力が失われ、かつての日本人が最も重視した美意識や思いやりあふれる生き様、さらには様々などころから異界からの信号を感じ取れる感性等々がどンドン枯渇し様々な歪みとなつて現代社会の問題として吹き出しているといえます。

また「形あるもの」への偏重は「無限」「相反するものの共存」等々に関する意識も貧しくなっています。先の指導要領で行われた「円周率を3ですませる」「中学生

の理科からイオンを削る」等々のことは人間ならではの発想の仕方を獲得する上での必須事項を義務教育段階でほとんど扱わないという暴挙だったと思っています。

これらの常識を信じて疑わない世の中の姿勢が、自分を引つ張ってくれる「夢・あこがれ」の喪失した多くの子ども達を生み出し、皮肉にも最も世間の求めている「学習」への無気力・無関心、そしてさらなる得点力低下を招いています。

また子ども達自身もこれらの常識に縛られてしまっていればいるほど、自分の内面と十分に対話できる状態にはなれません。対話して仮に大切なことをキャッチできそうになっても「常識からくる狭い思い込み」によってそれらを「関係のないもの」と決めつけ、いとも簡単に自ら切り捨ててしまいます。

参考 上原先生語録より「移り」

「一つの意識から、どこから次の意識に移るのか？これが自由に出来るから子どもは楽しいんです。西洋の感覚では「風邪がうつる」のようにキャッチの感覚だが、日本人の感覚では「縁もゆかりもない事が別でも起きた」時が『うつる』なんです。非合理的なものを見れば見る程、日本人はそこに『因果』を考えようとしている。脈らくなにも脈らくなを感じる事ができるんです。『子ども

の論理』はこれなんです。だから平気で飛躍できるんです。」
(平成五年)

折口信夫先生はこの一見関係のなさそうなもの同士に本質的な共通性を見出す力を「類化性能」と呼び、後述するようなかつての日本人の発想法を研究する際に重視しました。日本人はこの感覚を言葉遊びをはじめあらゆる場面で磨いてきたといえます。それが合理的思考法にばかり慣らされ「あれこれ」の場や本当の意味での「遊び」が失われた結果、この類化性能が鈍ってきたこともイマジネーションの世界との交流を楽しめない子どもを生み出している背景となっています。

3 『生まれてきて良かったの？』

「学力向上の大合唱」の前で子ども達は

実際に教え子達が話してくれたことをいくつか紹介します。子どもたちや大人（社会）の背後にどのように先の「常識」が影響を及ぼしているのかがこれらの言葉からもみとれると思います。

☆スナップ一

「お母さんに、あんたは失敗作、つて言われちゃった…」(中3、高校生 他に

も類例として「あんたなんか生むんじやなかった」)

こうした言葉が刻印された子がはたして活力あふれる生活を送れるでしょうか。自分の存在そのものを疑ってしまったているのですから、夢やあこがれどころではありません。

またこの事例には最近の大人が「子どもは天からの授かりもの」という意識から、親（教師）の作品・投資の対象という意識になってしまった」という点もあらわれています。

次の事例のように大人が子を責めるのではなく親が責任を感じすぎるのが逆効果になることもあります。

☆スナップ二

成績が伸び悩んでいた子。家庭内の様々な事情で子育てに気持ちを向けられなかったお母さんにあるとき謝られたというが「謝られたって困るんだよね…。だって私、今も生きてるんだしさ…。あんまり謝られると何だか自分で何とかしようって思えなくなっちゃう」 (中3)

「あなたのことを一生懸命に育てたんだよ」という親心を常に伝えられ続けている子が悩んでしまうこともあります。

☆スナップ三

「大事に育ててくれたっていうのは分かるんだけど…それなのにお母さんの期待通りにならない自分はダメだなんて思っちゃう。」
(中2)

☆スナップ四

「すごく苦勞したっていう話を聞かされるたびに、自分がお母さんをそんなに苦しめたのかって思っちゃう。自分が生まれてきた事が何だか悪いみたい。」
(中1 他にも類例)

☆スナップ五

高校生に多い発言。
「…重たい。うざい」

これらに共通するのは「大人の期待する姿に合わせようと一生懸命」という心が根底にはあることです。純粹に、けなげなまでに期待に応えようとしているのにその高い理想に届けないという現実の前に絶望感ばかりに悩んでいます。

学校が舞台となると、最近の傾向としては「テストのクラス平均点への影響」や「習熟度別学習」にまつわる事が増えています。

☆スナップ六

一番算数が遅れているグループで
「先生が、明日の実力テストではお前達は休んでもいいんだよ、って言った。すぐに冗談だよって言ってたけど…」
(小学生、中学生でも類例)

☆スナップ七

「Cグループのお前達にはどうせ説明したって分かんないだろうから、理由なんかは考えなくていい。とにかくこういう問題が出たら、こう答えを書け。それをパンパン覚える、って言われた。」
(小、中学生にも類例多数)

確かに「解き方」という形から入った方が理解するきっかけをつかめる子がいる事は事実です。しかしこのような言い方をされたのでは自分は「そこから先の段階には進めない子」と思い込むことになってしまいます。実際に教えていると、その後理解を深め思考力まで伸びる子もいます。

また物事の本質に直観的に目の行く子だからこそ形式的な教わり方では納得できず興味も持たないから学習内容を拒絶している場合もよくあります。そんな子どもほど「どうしてそうなるのか」を丁寧に教えられ一度納得すれば爆発的に得点力も伸びるのですが、現

実は学習不適応児として切り捨てられてしまうことが少なくありません。

さて、得点力の低かった子が得点できるようになればハッピーエンドになるかというところが簡単にもいきません。これは結構類例の多いスナップです。

☆スナップ八

「先生に、お前カンニングしなかっただろうな、って疑われちゃった…」と涙ぐむ。
(中学生)

疑われた子たちは時にみんなの前で立たされて次々と口頭で問題に答えさせられたり再テストを受けさせられたりします。「今までずっと教えてきて、お前みたいなやつが出来るようになった事なんか一度もない。絶対カンニングしたに決まっている」とクラス全員の前で断言された教え子さえいます。

ちなみに私は小学校に勤務していた10年間に自分のクラスでも他のクラスでも大幅に伸びた子を何人も見てきています。

結果が出せないで絶望している子は脱落者のまま生きる意欲を失い、現時点で期待に答えることが出来ている子もいつ自分が脱落者になって大人に捨てられるか不安でたまらない中にある…どちらにしても生きる意味を自らの中ではなく、大人・社会という外価値

に合わせなければならなくなっているために「生まれてきて良かったの?」「ここにいていいの?」という疑いが常に頭から離れなくなってしまうように思います。それ故、大人の期待通りの結果を出している子ども達でも、いつかそれが爆発し極端な問題を引き起こす場合があるのも周知の通りです。

4「かつての日本人の常識」を取り戻す

キーワードは「重ね合わせ」

子ども達の無気力・無関心や問題点をあれこれと批判する前に、我々一人一人の大人が信じて疑わなかった価値観や生き様を見つめ直すことが必要です。

児童態では、大人の方が子ども達から学ぶべきだとさえ考えています。それは子どもという段階は「夢を分母に、現実を分子に生きている」時代であり、古来からの日本人の発想が無意識に表出している生活を送っていると捉えているからです。

このあたりのことを丁寧に説明すると「心意伝承」の世界に踏み込みあまりに多くの紙面が必要となるので、ここでは上原先生や、先生の師である折口信夫先生・郡司正勝先生の言葉を紹介するにとどめさせて頂き

たいと思います。単に「時と場合によって自分を使い分ける世渡り上手」という生き方はまるで違った次元の生き方がここには示されています。

郡司正勝遺稿集『芸能の足跡』

「江戸の発想」(P.74)

〈歌舞伎狂言の構成は、仕組むといつて、いくつもの世界を、時代のちがう世界を、同時に組み合せて掬い交ぜにして作劇する。…これに有機的関連性をもたせ、最後には一つに纏まって結着がつくのを上々とする。

…近代の学校教育は、西欧的理念と方法によったものだから、はなはだ合理的科学的で、そうした教育がすっかり身につけているインテリにとって、こうした江戸の文化の構造や発想様式は、習いもしないし、生活にもないとする、もう体質的に受け入れられなくなっているのである。日本人も、まったく西歐人なみの頭脳になっていて、すでに江戸人とは異質の人種になっているのではないか。

江戸人の眼は、いくつもの世界を、同時に一緒にみるこの能力があった。トンボの眼のように、複眼的構造は、同時に、いくつもの事象を写しとることができる。…なまじい教育のある者にとつては矛盾として受け入れられないものを、おもしろしとして、そこに見るべきものを見た世界構造。それが歌舞伎

の構成であった。

江戸歌舞伎は、テーマを四つも五つも一つの作品に盛り込み、鶴匠の手綱のように、その捌き方の技術を、ほればれと舞台で鑑賞するような、そんな生活基盤の美的基準がもうなくなってしまうのかと考えこまざるを得ない。)

折口信夫全集第3巻

『古代研究 民俗学編2』

「神道に現れた民族論理」(P.171)

〈以上述べたやうに、日本人は一つの行為によって、其に關聯した幾多の事実を同時に行ひ、考へる、といふ風がある。…かういふ關係から、日本の昔の文章には、一篇の文章の中に、同時に三つも四つもの意味が、兼ねて表現されてゐる。ちよつと見ると、ある一つの事を表現してゐる様でも、其論理をたぐつて行くと、比喩的に幾つもの表現が、連続して表されてゐる事を発見する。…かういふ風に、日本の古い文章では、表現は一つであっても、其表現の目的及び効力は複数的で、同時に全体的なのである。〉

上原輝男『曾我の雨・牛若の衣装』

「心意伝承論の学としての定位」(P.239)

〔拙稿は、郡司の『童子考』を批評すること

が目的ではない。しかし、郡司がこの書をどのような意図で著したかについては、そのあとがきでも明らかである。：「どこかで、サインが送られているのではないか、どこかに記号が付けられているのではなからうかという旅である。こうした冥界からの発信を装った民意の底に沈んでいる記号を、もし読みとることができたらという、地名のない巡礼回国の旅に似ていないこともない。」と。

拙論では、こう言い換えることを許してもらえらるだろうか。心意伝承そのものに目的はない。：しかし、目の前の風景そのものが無個性化すればするほど、心意伝承への遡源は大きい。遂に、郡司はこれを冥界にまでつないだといえないだろうか。：

心意伝承と信仰伝承との区別をどうやら立てられるところに来た。心意伝承が無目的な遡源を主とした実感であるとする、信仰伝承は有目的な波及を主とした実現であるといえよう。そしてこの両者は互に作用関係にある。

拙論が、稚児の研究をそのモデルとして設定してみようとする意図の最終なるものはそこにある。つまり、心意伝承の研究の究極は、信仰伝承との接点を明らかにすることによって、民俗としての心性のヴェールをはがすことにある。～

この「心意伝承そのものに目的はない」と

いうことに関しては「行き当たりばつたりの生き方を良しとするのか？」という疑問を抱かれる方が多いのではないでしょうか。児童が教育を考える上で大前提としているのは心意伝承なのに、それそのものには目的がないというのはどういうことなのかとも思われるでしょう。

私個人としては「今の時点で意識できる世界⇨想定内の生き方」と「人知の及ぶことのできない果てしなく深みのある無意識の世界⇨想定外の生き方」との重ね合わせではないかと考えています。

心意伝承とは児童態風な言い方をすれば、実験的に人間の中にある「思考・感情・構え・（用具言語）の枠組み」とも言い換えられ、それらを意識化し整えていくことが「人知を越えた領域へと踏み込んでいく力を総合的に高めること」そのものだと思うのです。

（用具言語には括弧をつけていますが、母国語という観点、上原先生のこだわりで言えば時枝誠記博士の「言語過程説」にたてばやはり一種の枠組みの整えになります。）

子ども達は幼い段階ではそれこそ無意識にこの枠組みにしたがって素直に異界と共存した生活を送っています。しかしそれだけでは現実生活を通して生き様を深めていくという人生そのものの意義が十分に達成されません。それで一度中学年前後で夢よりも現実を

優先させた生き方に転換することが起こります。そして高学年以降は両者を自由自在に切り替えて現実を受けとめ、高い次元へ向上していく：それが児童態の考える大きな流れです。

こうした発想で生きるようになった時、人間は先述したような「現代社会の常識」と対立するのではなく、それらも包み込みながら同時に精神性も大切にしたい生活が可能になると思います。そうした生き様へのキーワードを「重ね合わせ」としたいのです。

ところが現代は「矛盾したものは共存しない」と考える傾向が強いので、どちらかに極端に偏ってしまいがちです。それが現実対応に偏りすぎれば自分を完全に見失うし、現実対応を拒絶すれば引き籠もりのように夢の世界に逃げ込んで出てこれなくなるという状態になります。ましてその時に内から湧き上がってくる夢の世界ではなく企業の思惑で汚染された夢の世界に浸りきってしまったのは活力を取り戻すどころか余計に自分の世界を歪まされ生きる力を奪われてしまっています。

「アイデンティティの確立」という発想はさらに子ども達を追いつめています。この訳語としてよく用いられる「自己同一性」ということから「自分の中に異なる自分がいてはいけない」という受け止められ方がされてしまいがちです。その結果、純粋な子ども達は

ど他人から誉められるたびに「本当は汚い自分が心の中にいる。それを知られては大変!」「みんなをだましていい子を演じ続けている…そんな自分が大嫌い」と悩んでしまふのです。中には「自分は二重人格なのではないか」と心の病気を疑う子さえいます。そんな子ども達に偉人や日本神話なども例に出しながら「生きている人間なんだから汚い自分をゼロにする必要はないんだよ。重ね合わせの仕方を心がけるだけでいいんだよ。」と助言すると安心したような顔をしてくれます。

様々な自分が重なり合って共存し、それらを郡司先生の言葉で言えば鵜飼のように美しく調整できていた日本人は、現実生活で現代人には耐えられないほど追いつめられても、それを乗り越える強さもきちんと持ち合わせていました。そうした生き様を現代人にも再び取り戻したいわけです。

*なお、心意伝承という言葉こそ使っていませんが、最近民俗学や教育学の分野ではない方々がこの発想で盛んに語られています。例えばアニメの宮崎駿監督はポニョの制作過程でのインタビュー(H19・3・27放送)で「脳みその中に釣り糸をたらず」という言い方で話されていました。さらに1999年アメリカでのインタビューではこう語られています。まさに教育を考える上でも重要な視点です。

「トトロの世界なんかはオリジナルのように見えますけれども、隣に見えない何かがあるっている感覚は、日本という島に住んでいて日本人が普段忘れていたとしても心の中に持っている感覚なんです。…自分達が自然の問題を考えたり、将来のことを考えている時に、自分達の無意識の中にこう先祖から受け継いでいる考え方をね、ちゃんと土台にしないと…どっかから考え方を輸入したりするだけでは済まない部分にすぐぶつかる。…日本の場合はやっぱりね、3500年ぐらい前から語らないとダメなんです。それは縄文時代と言われている時代からずっと日本の文化の中で色濃くずっと影を落としている。影というよりもずーっと大きな影響力を与えているものの感じ方があるんで…その感じ方に何か形を与えたい。」

5 意識の重ね合わせ

「レンガ積み職人」の寓話翻作

「やっぱり目の前のテストや順位は気にならない」というのが子どもの側にしても、教師・親の側にしても多くの本音です。私としては「本当の意味で得点力を伸ばしたいのなら、なおさら勉強の意識を変えたいいいんだ

よ。」と助言するのですが、そもそも問題集等々を使って勉強するには違いなのだから「意識をかえる」ことで何がどう変わるのかが想像もつかないようなのです。

そんな時に試みたのが有名な「レンガ積み職人」の寓話をもとに翻作をする課題でした。

☆レンガ積み職人の寓話を参考にして「勉強の場面」に当てはめたやりとりを考えてください。

ある人が、道ばたでレンガを積んでた3人の職人に尋ねた。「何をしているのですか?」

最初の人は、「ごらんの通り、私はレンガを積んでいます」と答えた。

2人目は、「夕方までにレンガを積んで壁を作れば50ドルもらえるんだよ。」と答えた。

そして、3人目は、その質問に対して、「私は、レンガを積んで壁を作り、それがやがて大きな教会になります。子どもたちが大きくなったとき、その教会を彼らに見せることを楽しみに、今こうやってレンガを積んでいるんです」と答えた。

当初の予想では見本も示しているのだからこれと似たようなパターンが並ぶのかと思っていたのですが、普段の勉強の姿勢や生き様と 관련된それぞれの子ども達らしい回答になりました。

*小5男子

一人目「漢字の練習をしているんだ」

二人目「明日の漢字テストに向けて漢字の勉強をしているんだ」

三人目「明日の漢字テストで100点をとるために勉強をしているんだ。100点をとるとお父さんやお母さんがほめてくれたりしてとても気持ちがいいんだ」

一人目「見ての通り勉強です」

二人目「テストがあるので勉強しています」

三人目「テストがあるので勉強しています。しかしこの勉強は将来のための勉強でもあります。」

*中1男子

一人目「見ればわかるだろ。親に言われて勉強をやっているんだよ」

二人目「夕方まで勉強をしていれば500円もらえるんだよ」

三人目「勉強を一つ一つ理解するんだ。もう

すぐ学年もあがるし。だって想像してごらん。一つ一つ理解したことが上の勉強で役にたつんだ。」

*中2男子

一人目「見ての通り勉強をしているのさ」

二人目「今回のテストで良い点をとれたら2000円もらえるからそのために頑張っているのさ」

三人目「勉強をして知識を身に付け将来は医者になってガンを治せる薬を作るんだ」

*中3男子

一人目「先生に言われて勉強をしているんだ」

二人目「午前中に勉強を終わらせないと友達と遊べないんだ」

三人目「僕が大人になった時、悲しんでいる人がいたら助けられるように勉強しているんだ。」

*中3女子

一人目「例題を解いています」

二人目「例題を解いて勉強をしています」

三人目「例題を解いて発展的な問題の土台作りをしているんです」

一人目「T先生が勉強しろってうるさいから勉強しているんだよ」

二人目「あと少しで入試だから勉強しているんだよ」

三人目「勉強しているんだよ。高校に合格したいからね。そしたら自分の好きなことやって好きな職業について。だから今勉強をしているんだよ」

一人目「見ればわかるだろ。先生に言われた宿題をしているんだよ」

二人目「明日までにこの宿題を提出すれば5点減点されなくて済むんだよ」

三人目「高校や大学へ行くために勉強を頑張っているんだよ。しかもそれだけじゃない。大人になってから世の中をみる時にも役にたつし、ひよつとしたら会社でも役に立つことはあるかもしれない。それに親になってから子供にもそのことを教えてあげることができよう。こんな素晴らしいことってあるかい？世界をどの角度からだってながめることができるかもしれないんだ。」

*高一男子

一人目「しょうがないから勉強している」

二人目「やっついて気持ちがいいから勉強し

ています」

三人目「苦手だけど克服した時には違うものがみえてくると思うからしています」

一人目「宿題やらないと恐ろしいことが起こる」

二人目「勉強して学年で上位になるのさ」

三人目「魂をみがくためだっべよ」

***高一女子**

一人目「勉強だよ。私の頭の中に入っているの、かどうかわかんないけど。」

二人目「勉強だよ。楽しいの。今ノッてきているからじゃやましないでちよーだわい。」

三人目「勉強だよ。将来私が学んだことを生かして保育士になっていけるように頑張っているんです。学ぶことが多ければ多いほどキャッチできることが増えるんです。素敵なことですよ。気づいてもらった子供も、気づいてあげられた私も嬉しくなるの。みんなが幸せになれるわっ」

個々の回答の特徴については私が指摘するのではなく、自ら「意識の方向」や「構え」等々の違いに気づいてもらうために、自分や他人の書いたものを単純な座標軸に分類する

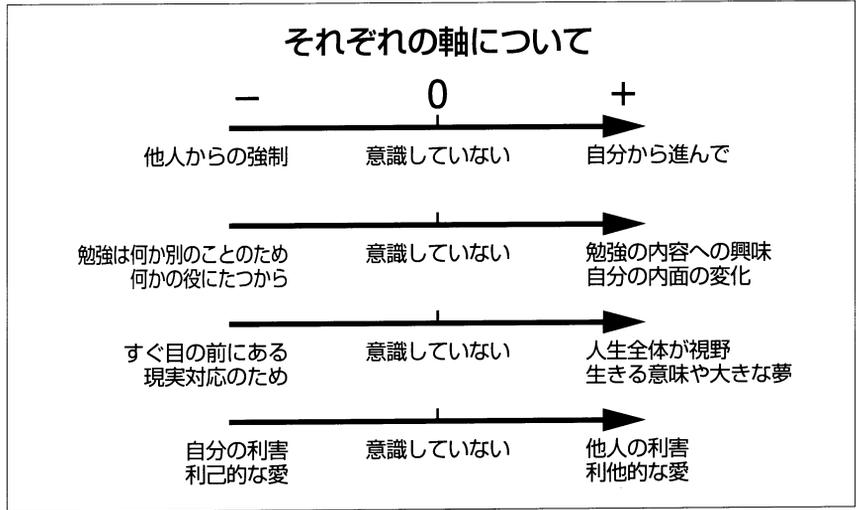


図1 それぞれの軸について

作業をそれぞれにしてもらいました。

書きながら「あれっ！こっ！こうしてみると私 のって一人目も二人目も三人目もほとんど変わってない！！」「私さあ、結構三人目では広がっている言葉を書けたと思うんだけど…でも実際に勉強している時って一人目でや

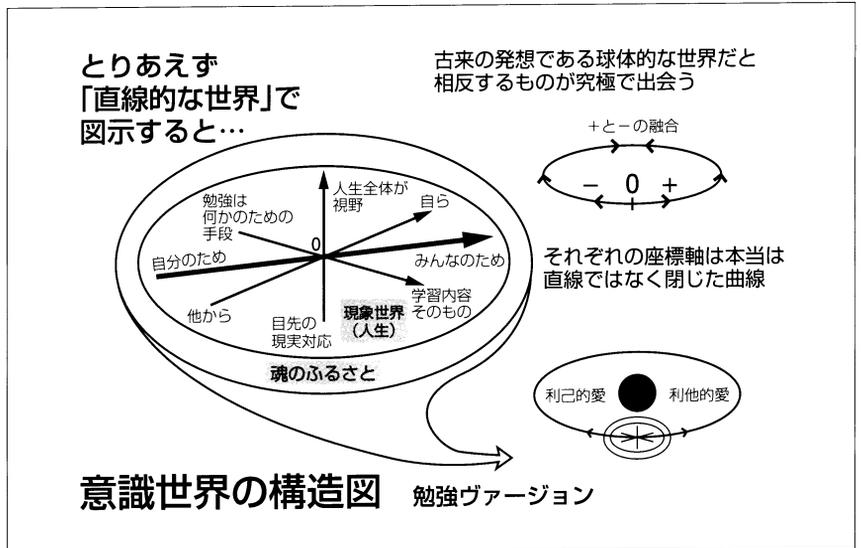


図2 意識世界の構造図 勉強バージョン

っているよね。」など様々な気づきがあった様子でした。そしてそこから見た目には同じ行動や言葉であってもその裏側に大きな「次元の違い」とも言うべきものがあり、同じ事をして毎日を通して生きているようにも、人によってまるで別々の世界を生きていることになるといふことにも気が付いたようでした。

ただ、子ども達にも注意したのですが一人目や二人目の意識を否定するというのではありません。実際には三人どころかもっと多くの自分が重ね合わさって一人の人間はできあがっている、そしてそれらの様々な自分をしていられるかが大事なことなのだと話しました。

これを書いて1年以上たつ子も多いのですが、いまだに意識や構えが狭くなっているときに「ホラ、レンガ積み」と言葉かけるとハッとしように表情を変える子が少なくありません。

6 感動と喜びの場

トランスフォーマーセッションが
起きた実感

実はこの調査のきっかけは高1の教科書にこの寓話が載っていて、その際に英語の先生が教室で生徒に力説したという言葉を聞いたことでした。高校生からの伝聞ですが参考までにその言葉も紹介しておきます。

*ここには大事な事が書いてあるんだ。だからお前達もこれみたいに英語の勉強をやるにしても、一人目みただと「やらされているだけ」になっちゃダメだ。二人目だと「定期テストや模試のためにやる」ということになる。三人目だと素晴らしい目的意識を持つてやるということだ。それは「一生懸命やって大学を目指してやること」だ。それによって将来ボーダーフリーの大学に行くのか、良い大学に行くのかが決まるんだ。

上原先生は「国語に限らずすべての授業はトランスフォーマーセッション（意識の転換・时空の転換）を起こす場」と強調されています。もちろん授業時間だけではなく、子どもと関わる場面すべてがトランスフォーマーセッションと関わるという自覚が大人の側に求められます。身近な大人である教師がこの英語の先生のような意識の範囲でどまっていたのでは、子ども達の中にハッとするような瞬間は起こりえません。

ば、学校という場を離れた日常でも子ども達は盛んに学んだことを適用していきます。まさに日常生活、大袈裟な言い方をすれば卒業後の人生までもが授業の延長となり続けるのです。児童態の指導案の目標が通常のような「到達目標」の形で書かれていないのはそのためとも言えます。

この「伝授」ということに関して、日本人は古来から独特の発想をしてきました。それが端的に現われているのが和歌や古典芸能等々の世界です。郡司先生の言葉を引用します。

郡司正勝 『副定集6』(P.180)

（日本文化が模倣文化といわれ、贋作はうまいが創造性がないなどの評価があるとすれば、この「見立」のせいである。日本人の創造には、ヨーロッパ文化における創造性とはかなりちがうものがある。それが「見立」である。本物それ自体では、意味も趣向もない。無趣味そのものとする。真実というものの考え方が、キリスト教の神と結びつけて考える西欧哲学や美学とは、そこがちがうのである。

神は本物の鬱陶しさを悦ばない。趣向という精神の働きの喜びがないからである。神を迎える祭の日には、人々は精いっぱい趣向を「見立」て、造り物をして、あつといわせ

る。神は、これを「風流」として受納するのである。したがって「仕組」に新鮮な驚きがなくてはならぬ。偽物も「もどき」「やつし」も驚きの美学である、と言い切ってしまうと語弊があるが、本物以上に、よく出来ていると想わせなければならぬ。本歌取の精神は、この働きの美学である。見立とは、根源の本物を予測させ、その時々の新たなる発想で装うことよって、光り輝くことである。「遊び」の真意もここにあろう。」

たとえテストで100点を何度もとっても喜ぶのは大人ばかり、子どもは実は嬉しくもないどころか、ますます嫌いになつていくというのはよくみられる姿です。「本当はやれば出来るんだよ」という自分に気づいてもらうために時として敢えて厳しく指導することがあつてもそれはいいと思うのですが、それで高得点をとつても本人にとつて苦痛でしかないのならそれはまだ時期が早いのかも知れないと「待つ」姿勢も大切です。

勉強のさせ方でも、ある先生があるクラスに対して効果をあげたやり方が「〇〇方式」として宣伝されることがよくみられますが、これも子どもの気持ちに主体が置かれなければ逆効果になります。

やり方が大切なのではなく、自分が確かに授業を受ける前の人間とは変化したという実感、それを喜んでいく気持ちがあるかどうか

が基準です。勿論、毎時間変化を確実に実感できるとは限りません。しかし、ある種のゆさぶりをかけられて、何か今までの自分が動きはじめている、という感覚は必要です。

児言態の授業は言い換えると「子どもを限界まで追いつめる授業」です。全員がその時間内に課題をこなせるといふような「到達目標型」の授業ではありません。それぞれの子ども達が今の自分の精一杯を出し、その限界の姿を自分で確認する。すると自然に次のステップに脱皮できるといふ発想なのです。

自分がゆとりを持つて対処できる枠内の内容では「出来てあたりまえ」ですから授業が終わつても心は普通の状態です。今までの自分のままで十分という気にしかなれません。

つまずいたり失敗をしないように配慮されすぎた授業やテスト前の訓練も、逆に未知なることに対応していく力を低下させます。ある番組である企業の研究部に所属するベテランの技術者が嘆いていました。「最近の若い技術者は開発の途中で予期せぬことが起こると実験は失敗したと決めつけてしまう。ひどい場合には予想に合わせてデータを改ざんしてしまう。我々の若い頃だったら、そんな時はもしかすると新たな発見につながるのではな

いかとワクワクし夢中になって研究したものでしょうが」といふような内容でした。小・中学校と結果が分かっている実験ばかりさせ

られ、進学を重視した高校では実験も観察もほとんど行われない理科教育ばかりを受けてきたのでしようから、そうした姿勢になつてしまつていけるのも当然のことです。

限界の壁に突き当たり、何とかしようともがいているうちに思いがけなく類化性能が発揮され、予期せぬ打開策を見いだせた新たな自分との出会いが起こります。その時の「驚き」「感動」「喜び」が、さらなる自分との出会いや困難な課題を自ら求める原動力となるのです。

児言態が「経験に先立つ世界、心意伝承の世界を前提にしている」ことに対して「ならば教育の必要がないのでは？」と問われることがあります。その答えもこのあたりにあると思います。いくら生得的に伝承されているものでも、それがあたかも昆虫などが本能として行動できるかのように当たり前に出来たのでは人間は「たいくつ」であり、毎日がそうなら「苦痛」さえ感じるでしょう。学校の勉強を面倒くさいと拒絶している子でも、好きなゲームではレベルを上げて困難を楽しむのもその表れです。だから「感動・喜び」が常にある人生を歩むために教育の場も人生の困難も必要なのだと思います。

藤岡善愛先生を迎えての会の際、会員の次のような質問に対して藤岡先生と上原先生がこのように答えていました。

T 聞いてばかりいて申し訳ないんですけど2年前だったか：生命力と想像力：イメージの強い子が生命力が強いってやったでしょ。最近我が身を考えるにあたってイメージが貧困というか湧かないというか：それは生命力がないっていうことですか？

上原 それは押さえているからですよ。

「私」が押さえているからですよ。私を潰してしまえばイメージなんて出るに決まっているんです。だから「私」という個人を捨てることですよ。そうしたらパーツと広がって出てくるんです。

藤岡 あのね、「私」っていうのは「一人きり」と思うからアカンのですよ。

「私」っていうのは何層もあるんです。一番上の「私」なんていうのは気楽にどうかして剥いでしまえばいい。なんぼでも下から私が出てくるから：安心して。

T 向いたら何も出てこなかったりして…。

上原 いや、思い切ってむいてごらん。なかつたらなかつたでいいじゃない。

藤岡 それは大丈夫。こうして生きているいじょうはね「私」っていうのは少々剥いてもまだあるの。遠慮無しにどんどん

ん剥いていって。ありますから。普通に言っている「私」っていうのは、やっぱり「こうでこうしてこう」と常にみている「私」ですよ。それを捨てると言っているわけです。ですけどね、まだあるんですよ。捨ててもまだあるんです。：最後にもし「魂」というのがあるとすればね、「私」っていうのを捨ててもまだ私を成り立たせている「魂」というのはあるんですね。騙されたと思うてやってみれば分かりますから。

7 知的内容の果たす役割

思考実験を通しての
「自分の器(うつわ)化」

先に現代人の呪縛となっている常識の一番目としてニュートン力学をあげました。実はそのことを示して頂いたのは学生時代、基礎自然科学という講義で出会えた満尾寿男先生です。最も印象に残っているのは「現代社会はいまだにニュートンの因果律の段階である。しかし最新の物理学はアインシュタインの相対性を越えて、相補性が常識になっている」という趣旨の言葉です。

二番目の進化論の呪縛は藤岡先生からの示

唆ですが、現代の生物学の常識は「共存」ということであるにも関わらず：という、やはり相反するものが合わさってという発想に早く転換していかなければならないという内容でした。

どちらの先生も自然科学の立場から、実は古来から日本人が根底に持ち続けてきた発想と通じることを話されています。現代のハイテク産業を支える量子論などは「同時に別々の状態が共存する」「それらが重なり合っている」等々、これまで述べてきたことと直接関連する発想があちこちに出てきます。自然科学による呪縛を解き、かつての日本人の常識に立ち戻る上で、これらの新しい自然科学を用いるというのは知的教科(分野)の持つ大きな役割の一つです。

同様に大切なのが「思考」です。兒言態ではさらに「感情思考」「イメージ思考」「論理思考」と分けていますが、今まで抱いていた(自分を縛ってきた)「感情やイメージ」を一度切り離すことで新たな世界が開示することを実感してもらうには「思考」の授業抜きのようにした方が有効な場合が多々あります。兒言態が感情を扱った教材なのに「思考」の授業として行う時があるのもそうした理由です。

上原先生が「芸談の研究」で「移り・成る」を問題にされています。古典芸能の稽古

は役の気持ちから入らずひたすら所作の型を習得することから入る、そして型が身に付いた時にその役の魂が憑依したという感覚になるといいます。その時には自分だったらこんな場面で泣くことは絶対にはないと思っているのに、本当の涙がこみあげてくる、ということもあるそうです。仮に憑依の感覚が伴わなかったとすると、それはどんなに上手に演じていても「物真似芸」として卑下されるし、役者としての格も上がっていかない。これは教育として人間の成長を考える上で大変興味深いところです。

ちなみに日本人は昔から魂の乗り移りという感覚を持っているだけあって、この「憑依」という言葉は現代人に対しても今なお威力があるようです。それまで説明文でも物語文でも読解が苦手だったという子に「筆者や登場人物の気持ちになればいいんだよ」と助言してもなかなか変化できなかったのが「憑依させてごらんよ」と助言すると演習問題をたくさんしなくても良問でコツをつかむだけで実力テストの結果が大きく変容する子が何人もできています。

このような「憑依」が本当に起こるためには、今までの自分を脇に置き捨ててのなりして自分を「器（うつわ）化」する必要があります。自分なりの強いこだわりや、信じて疑わない思い込みがあればあるほど、新たな

魂が寄りついたという感覚はありません。つまり新しい自分との出会いは起こりえないのです。

かつて小3を担当した際「相手の身にもなって考えてみてごらん」と叱った時に「オレは平気だよ」と言い返されたことがあります。この場合のような「オレは」というような意識から、次の段階に進める上でも憑依感覚は有効です。

ここでは家庭教師生活で小学生から高校生までの教え子たちに幅広く受け入れられた2例をごく簡単に紹介します。一つは「機械的な知的作業」、もう一つは物理等々でよく用いられる「思考実験」という手法という観点からの実践例です。

『ぶんぎつね』

課題は「これを読んだある子が、兵十はひどい！ごんがせっかく栗や松茸を一生懸命に届けているのに鉄砲で撃つてしまうなんて!!と感想文に書いていました。そのことについてあなたはどお思いますか？」です。

知的作業としては、兵十の意識世界でのごんに関係する場面に線を引くことをしてもらいます。するとこの物語をよく覚えていた高校生でもその少なさに驚きます。そして改めてすれ違いの悲劇を感じ、その瞬間「そういう話だったんだ！」と大粒の涙を突然こ

ぼしはじめた高校生もいました。

さらに最後の場面を兵十を中心にして絵コンテに描いてもらうこともしました。カット割りで見えたいのは裏口を出ようとごんを発見し撃つたあとに栗などを発見するところの順序です。栗などのアップとごんの出ている順序が逆だったらどうなっただろう」と問いかけ頭の中で場面を再構成してもらいます。すると、目に飛び込んできたもののほんのわずかな順序の違いによって世界が逆転するということを実感できます。

ちやうど家庭教師をしている子ども達は思春期・青年期でもあり大人や友達との人間関係がうまくいかずに悩んでいる場合が普通にあります。当然勉強に対する意欲も失われまです。そんな時に、この活動を通して自分の日常を振り返り、今まで「何故自分の気持ちがかたつてくれないの!」と無条件に反発していた相手に対して冷静に考え直し、関係修復へと向かったケースはかなりありました。それだけに何年たつても「あの ごん はよく覚えてる」と言う教え子も多いです。

「水の分子」

これは化学での思考実験です。思考実験とは実際の実験が不可能な場合でも、文字通り示された約束通りに頭の中で思い描くことで

結論を導き出す物理などでは特に大切な手法です。

課題としては「水に溺れている時に、ドラえもんのスモールライトで水の分子と同じ大きさまで縮められたら周囲はどんな世界になるでしょう」というものです。通常、教科書などに水の分子のイラストが描いてあるのにミッキーマウスの頭部のような形をしたものに取り囲まれているような様子を思い描く子がほとんどです。しかし量子論など最先端の科学で説明されている原子・分子の実相に照らし合わせ、その通りに頭の中に描いてもらうと全く常識とはかけ離れた結果が得られてくるのです。それはまさに仏教でいえば「色即是空」の世界です。

余計なイメージをくつつけずに想定できればできるほどインパクトは強烈です。それこそ興奮状態になって「エッ！っていうことは、…」と次々と想像の世界を広げ周囲のモノに対するイメージを転換させていく子は多いです。

本当に感覚が豊かで体感が伴ってしまう子のなどは驚きでハッと表情が変わるに留まらず「水以外でもそうみえるのかな…アッ、なんだか気持ち悪くなってきた…」とあまりの意識世界の転換に貧血状態のようになった子さえいました。

家庭教師で教える教科が理系中心なのでなおさらそうなのですが、数学・物理・科学の分野では日常での感覚・常識が通用する世界が実はほんの一部でしかないと実感できる分野がたくさんあります。複素数をガウス平面で表わしたものなどは、古来の日本人が「実相の世界はここにはない。形ある世界は単なる現世（うつしよ）」としてきた世界を感じさせてくれます。相対性理論の世界やタイムスリップの話などは、兎言態のいう「トランスフォーメーション」とも直結する話だけに、やはり多くの子が興味を示してきます。

これらをもし物語教材などを通して扱うと単なる「作り話の世界」としか受け止めてもらえないのが、自然科学のような分野で扱うと「世の中が本当にそうなっているのか」という具合で受け止めてもらえるので、「呪縛からの解放」と「新たな転換」とが同時に実感し易いようです。

まして子ども達にとって感情などと全く無縁だと思っていた自然科学分野での体験だけに「驚き」も倍増し、その後の生活への影響が大きくなります。

自然科学分野の用語を教える際に、単に定義を丸暗記するだけで終わらず、可能な限り概念をも獲得するように示唆することは高い次元の発想に向かうことのできる枠組みを整

えることにもなります。

ですから、たとえ兎言態風の教材による国語でなくても小学校の先生でなくても、レング積み職人の寓話のように、教師自身が今まで通り日々教えてきた意識の他に高い次元の意識を重ね合わせれば「構えの変革や活力を育てイマジネーションの世界に誘う」教育実践は可能です。

参 考

上原先生語録より

「戦後の学校の先生は世の表面に出すぎた。教育者の本来性は、陰の存在に徹すべきであった。もし、人の命とかかわり、その魂を問題とする考え方が正しいとするなら、僧侶が出家と呼ばれるように、われわれもまた、潜在世界である子ども心の深層に住み替えなければならぬはずであった。」（前掲書『感情教育論』より）

「大人は『大人の時間・空間』で子どもをしぼっている。『大人の常識』と『子どもの意識世界』が大きくずれてしまっている。『子どもにとっての潜在的な時間・空間』とは何かを探る必要がある。我々が常識を捨てて子どもに近づいていかなければならない。」

8 庇護してくれる大人の存在

「あれこれ」は「おばあちゃん」
「包まれる気分」の中で

子どもが失敗をして母親が叱ろうとした時に、脇からおばあちゃんが登場して助け船を出す、というのはドラマなどでもよくみられる場面です。特に現代のように「失敗は悪」「親の想定内で育たないと気が済まない」とされて窒息寸前の子どもにとってそれがどれだけ救いになることでしょうか。

どんなに教師が子どもを中心に活動を設定しようとしても意識のベースに「おうち気分」、ここでいうならおばあちゃんに象徴されるような「失敗しても人格を否定しないで包み込んでくれる」「一見どうでもいような事に夢中になってあれこれ試したり遊んでいる姿を温かく見守ってくれている」感覚がある子なのかどうかの差は計り知れないものです。

ここで庇護する存在を「おじいちゃん」ではなく「おばあちゃん」としたのは、見た目には最も地道でありふれた家庭内の仕事という現実対応を長年経験し、様々な苦労や失敗、喜びや悲しみ等々の裏付けを重ね合わせた上で再び人間として大切な世界に立ち返った存在だからという理由からです。ですから

舌切り雀のような世界なら「おじいさん」の方がふさわしいといえるように、絶対に「おばあちゃん」でなければダメというわけでは勿論ありません。

子どもの中でも特に自分の世界に素直な子はどうしても現実対応がうまくいかず、結果として周囲や自らの呪縛でつぶれてしまいがちです。上原先生はそうした「稚児」とも言えるべき子どもに庇護する立場、いわば守護神のような存在がっていたことを説かれました。そうした存在があればこそ子どもは救われるわけです。私がよく子ども達に話すドラマやアニメの例でいえば「ちゆらさん」での「おばあ」、「がきんちよ」での「おじいちゃん」、「がきんちよ」での「じいじ・トト・カカ」です。

最近のように核家族で親が忙しすぎたり厳しすぎたりする現実が増えていると教師が子ども達にとつての「庇護」する守護神という側面を持たなければなりません。厳しく現実対応の指導をする面が主でも、どこかに「おばあちゃん」のように自分をまるごと全体を包み込んでくれる存在と子どもが感じられる一面をも持ち合わせている必要があると思います。

そんな「包まれている感覚」がない子どもは携帯依存症に代表されるように「ひとりである時間」を恐れがちです。それは純粋にイ

マジネーションの世界に浸れる時間帯を失い本来もっている活力も低下させることになり
ます。

イメージの動き方は自由自在ではなくそこには偏りが常に生じています。偏りを生じさせている要因の3つは「心意伝承」「個人の経験の蓄積」「常識・思い込みからくる呪縛」で、それぞれに影響された想いが様々に重なり合い交錯しています。その偏りを見つめることで今の自分のありようも分かってきます。大きな存在に包まれて、安心して一人でイマジネーションの世界に浸っている時には、このうちの深い部分での偏りが自覚され
ます。それがやがてより深い部分に隠れていた自分との出会いへと導いてくれるきっかけになるのです。

結びにかえて

悩み方が変わればいい

高3になる教え子、Cさんの言葉をいくつか紹介したいと思います。Cさんを教え始めたのは小学校6年生の時です。いつもは明るく元気で自分の世界を大切にしようとするCさんですが、頭ごなしに価値観を押しつけてくる教師には時として強く反発します。テス

ト対応主体の授業に意欲をなくし、現実対応との摩擦で自分を見失いかけた時期もありました。夜中など一人の時に携帯依存症に足をつっこんでいるという自覚があったようです。それでも御両親に包み込まれる雰囲気の中で文字通り「あれこれ」しながら自分の落ち着く場所を探っています。

そんなCさんの語録からの抜粋です。(対話の場合 Cさん・C、筆者・T)

*高1 6月 「悩んでいる時に見上げたら富士山が目の前にあった。富士山は何を語ってくれると思う」という問いかけに対して

C: とりあえずあれか: 「悩むだけ悩め」と言ってくれるのか、それとも「こうだよ」みたいなことを言ってくれるのか: 何を言ってくれるのかな: 山だしね、偉大だし: 何かためになる事というか: きつとそんな無駄なことは絶対言わないだろうし: . . .

T: 無駄なこと? 例えばどんなことが無駄なこと?

C: 何で悩んでんの? みたいな事は言わないじゃん: ぜってえ(絶対)。普通になんかこうこつちが「ねえ、富士山。今日こんなことがありまして」みたいなこと話しかけなくても、「もう分かっ

ておる」みたいななんかアドバイスしてくれるか: アツ、違うな: 「おのれで!」みたいな。具体的に言ってくれるんじゃないくて、自分でこう「道」: 自分の中から答えを見つけ出せるようなヒント的な: 富士山はマジ、めっちゃこう「人生なみにやべえ」って時に相談に行く感じだから: . . .

*高2 9月 メール

なんか流れていくのも難しいねえ(下)

私って今流れに逆らう鮭みたいな感じ?

(笑)

それともいまだに川に飛び込めない熊か?

(笑)

テストが終わって勉強ってゆう逃れ道がなくなったらどおなるのかしら(上)ふつ

(笑) いつもは勉強から逃げてるのに今は勉強に逃げてるなんてはあん? って感じよね(0)

まつ、勉強に逃げてるってほど没頭してないけどね(笑)

何が言いたいねん!(笑)

*高2 2月 誕生日の時のメール

先生と春一番のあったかい強い風に背中を押されて17歳を迎えられたこと、とても幸せに思います。

まだまだ湧かない実感は1年かけてじつくり味わってきます(笑)

私の「あれこれ」が間違ってるようが正しかろうがいつまでも見守って下さい。

(笑)

いい1年を過ごせるように毎日を大切にします(e)

*高2 3月 夜中に送信されたメール

先生! 雪綺麗だね! 今窓開けて外見てるの

♪

暗くて分かりずらいけどきつと田んぼ二面に真っ白な銀世界だよ(e)

こんな久々に積もった雪も朝が来たら溶けちゃうかね(、・e・) 切ないね(、・e・)

いやまだ分かんないけどさ(、・e・)

今もベランダに落ちた雪に水がポタポタポタポタ言ってるよ(、口)

静かにしてこの風景に浸りたいのに(、△)(、)

無常だねうん。方丈記だねうん。変わりゆくものだねうん。

古き良き時代の女ですから! ↑(?)

*高2 3月 姉の大学卒業式をみにいった

感想メール

卒業式が終わってから姉ちゃんが外で友達

と写真撮ったり後輩からアルバムとか色紙もらったりするのがすごく泣けた。私の知らない姉ちゃんがいるんだなーって思っ
て。

4年間陸上頑張ってきた後輩に沢山愛されて青春したんだなーってのがすげー羨ましくして「ㄱ」

なんでそこまで泣くの？ってぐらい泣いた
(笑)

姉ちゃんが泣いてる姿が何だか凄く嬉しくてね、姉ちゃんが泣いてるとこ沢山写真撮っては、ひたすら泣いてたの(笑)泣くって素敵ねてきなム、△、〃

*高3 4月 家庭教師の授業後、ピンポン玉を使ってのある動作に延々挑戦

(1時間近くたち、つぶやきながらだんだんと気持ちが高ぶり早口で次々とまくしたてていく)

マジやなんだよね、こうさ、私生活もだらけてっからさ、こういうちいせーこと成功させてさ、「ヤベー！やり遂げた！！」的なそういうのが欲しいわけよ。

…こういうくだらないことを成功させないとこの先、何も自信がつけられないし…なんかこういうくだらないことを頑張れた自分を「アーあの時頑張れたから」みたいな感じで励ましつつ、なんかほかの生活にも

ちゃんと終わりまでけじめつけていけると思うし…。

こんな「クダラネー」とか「無理ー」とかやってっけど、何だかんだ「やりたい！成功させたい！！」みたいな内心メツチャ泣きそうなくらいマジ頑張ってるの！それがなんかピンポン玉に伝わらないっていう自分の手にも脳みそから電波いつてないし、そういうのが悲しいし、どうしたらいいか分かんないし…あー(と深いため息。ここからは静かに語り出す)

頑張りたいんだよ、このくらい…。とりあえず外に飛ばしてあげたいんだよ…。あー、切ない…切ないね…ピンポン玉よ…。

*高3 4月 知り合いの家に行った際、ちよつと留守番を頼まれての時に送ってきたメール

こんなに静かで、それでいて無心で居られたこと最近あったかなあ。最近じゃなくて今までであつたかな。

テレビもつけないで、耳に好きな曲だけが流れるイヤホンを入れて、あつたかいお日様と優しく揺れる洗濯物が隣にいる、鏡の前でこのメール打ってるんだ。(笑)

知らない土地の知らない場所はこんなにも新しい自分を見つけられるんだね。知らないっていつてもたかが筑波なんだけ

どね。(笑)

私ね、もつと学ぼうと思ったの。自分の知らないことを知っていいこうと思った。

まだ17年しか生きてないから沢山沢山知らないことあるけど身近なところから言ったらママの家事とかね、パパの仕事の大変さとかね、姉ちゃんの気持ちとかね、先生が私に伝えたいことや、分かってほしいこととかね、たくさんいろんなこと。自分のこやしを増やそうと思った。

親の話をはいいはいつて流したりうっさいって思ったとしてもそんな言葉言っちゃだめだね。無駄なことなんて1つもないんだよね。出逢いを大切にして、人に感謝しなくちゃね。いつでもありがとうって。

私いま泣いてるんだ。優しい気持ちになってるのかな？笑 なーんて♪変わりたいと思つたの。

本気で思ってるかな？口だけで終わっちゃうかな？中身のきれいな人になりたいから頑張ろうって思つたの。

*高3 5月 家庭教師の時間

携帯に依存しだしたのは中3の時だな…今もそうだけど。いつでも携帯を中心にしたい生活をしたいんだよね。だって嫌じゃん、携帯に依存してんのって。でもなくしたいのになくせないな…。でも寝るとき

はマナーモードにしたり：変わってはきてる。本当に単なる暇つぶしにしかなくていないんだよね。

だから今日は携帯をここに持ってこなかったんだ。いつもは持ってきてたじゃん。でもこの時間は大事な時間だと思ってたから：メールの着信とか気にするのをやめようと思つて。

*高3 5月 メール

今日、いもがらが目に入ったの。いもがらなんてけんちん汁でしか食べたことないんだー。

いもがらはよく、近所のじいちゃんがうちに持ってきてくれたの。

じいちゃんのは、先生も知ってるスイカのおじいちゃんね。(注 2年前に他界)

いもがら見て、じいちゃん思い出して「そおいえば最近、じいちゃん来ないなー」なんて思つたあとすぐ「あ。もういないんだ。」なんて思つて…。

切なくなりました。

今も涙が止まらなくて…なんだか寂しいね。

でも、じいちゃん思い出しながらこんなにも泣ける自分を凄く幸せに思うな。言葉変だけどねっ。(笑)

時間が経つのは早いね。残される側つてこ

んなに寂しいんだね。

でも今日思つたのは、人つて食べ物と結び付いて思い出すこともあるんだなつて。

*高3 5月

指数関数を通してかけ算に対して「通常抱く加算的イメージ」と「累乗的イメージ」のズレが日常の生活意識にどう反映しているかを考察した際に

「勉強かんけーねーな！人生だ！ふけー。難しいな：でもそれが出来たとき全く違うことになるんだろうね…」

本人によれば、最近はささやかなことからでも人生の深い部分を直観する感覚が呼び覚まされてきたような実感があるそうです。

しかしそうした感覚が目覚めてきたからと言って悩みがなくなったり人生が順調に展開するとうわけではありません。16号に掲載した実践記録で詳しく触れた折口先生の「貴種流離」や上原先生の「犠牲論」の立場からすれば、むしろより高い壁に突き当たつて深く悩んでいくことの方が増えるとも言えます。

事実、つい先日も進路について再び悩み始め「この前、せっかくみんなの言葉に耳を傾けよう、つていう気持ちになれたのにまた親の言うことをスルーしちゃつた」とより自分

を責めていました。こうした背景には「子どもたちには常に右肩上がりの進歩を要求する大人の姿勢」も当然あると思います。

「人生も万物もすべて波。悩み方が変わればいいんだよ。こつちなんて五十近くなつても毎日あれこれなんだからさ。」等々と話しているうちにこわばつていたCさんの表情が自然な笑顔に戻っていました。それでいいんだと思つています。

(茨城・水戸・元小学校教諭

現家庭教師「小学生・高校生対象
ワニワニ学級主宰」)

